報道関係者各位
プレスリリース

公立大学法人
下関市立大学
Shimonoseki City University

海峡の英知。未来へ　そして世界へ。
The wisdom of the Straits. To the future and to the world.

配信日：2023 年 10 月 11 日

〒751-8510　山口県下関市大学町二丁目１番１号
TEL:083-252-0288（代表）FAX:083-252-8099
URL:https://www.shimonoseki-cu.ac.jp/

件　　名

大学院生による「幼児期の言語発達」に関する日本初の数学的アプローチ／地域企業との連携

内　　容

１）詳　細

現在、言葉の遅れがみられる子どもは増えており、日本の乳幼児教育に関する政策や研究は先進諸外国と比べ遅れをとっていることが問題とされている。言語発達と数学能力の関係性についての今回の研究は、日本においては初めての試みといえる。

言語発達を促す要因として、乳幼児期の周囲の大人との言語的な関わり・ジェスチャーなどの身体的な関わりが影響しているとされていた。しかし、本学大学院生の岡田崇さんが中心となった太田准教授らの研究結果からは、数に関する取り組みが、子どもの言語発達に大きな影響を与える可能性が示唆された。

２）調査の概要

下関市内の企業が運営している企業主導型保育園と連携して、2020 年 3 月～2022 年 5 月の間、保護者の同意が得られた乳幼児 13 名（月齢 17 か月～20 か月）を対象に研究調査が行われた。

３）お問合せ先

下関市立大学 大学院 指導教員/太田 麻美子　准教授（研究責任者）
ohta@eco.shimonoseki-cu.ac.jp

問い合わせ先・担当者連絡先

経営企画部長	広報ブランド戦略課主幹	担当	連絡先
はらだ　たつひろ	こやま　たけし	おきい　けんじ	083-253－8967
原田　達浩	小山　英	沖井　健治	

提出日	2023 年 10 月 11 日	広報連絡先	Tel.083-253－8967	koho@shimonoseki-cu.ac.jp

報道関係者各位
プレスリリース

2023 年 10 月 11 日
公立大学法人 下関市立大学

【研究報告】
下関市立大学が地域の企業と共同研究を行い、乳幼児期における数概念の育成が、言語能力の発達に大きな影響を与える示唆を得た

● 研究の概要

今、世界において乳幼児に関する研究の動向が注目されている。特に、日本の乳幼児教育に関する政策や研究は先進諸外国と比べ遅れをとっていることが問題とされており、喫緊の課題と言っても過言ではない。

そんな中、少子高齢化が急速に進んでいる下関において、大学院生の岡田崇さん（下関市立大学大学院教育経済学領域　太田麻美子准教授 研究室所属）を中心に、下関市内の中小企業と連携し、乳幼児期における数概念の育成が言語能力の発達に大きな影響を与える示唆を得た。言語発達と数学能力の関係性については、近年注目されている分野ではあるものの、日本においては初めての試みであったといえるだろう。

今回の研究は、言語機能が急速に発達するとされる 1-2 歳児を対象に、言語能力の発達に大きな影響を与える要因を明らかにするために実施された。その結果、言語発達には視覚概念および数概念が影響を与えていること、加えて言語概念から言語的表現への移行に身体的表現が介在していることが明らかになった。これまでの研究では、言語発達を促す要因として、乳幼児期の周囲の大人との言語的な関わり・ジェスチャーなどの身体的な関わりが影響しているとされていた。しかし、今回の岡田崇さんが中心となった太田准教授らの研究結果からは、数に関する取り組みが、子どもの言語発達に大きな影響が与える可能性が示唆されたという。

本学の韓昌完（ハン　チャンワン）学長は「少子高齢化が急速に進行している下関の事情を考えると、子ども 1 人一人を地域社会全体で支えていかないといけない時に、今後の子育ての在り方に大きなヒントを与える結果である。特に、地域企業との連携を通して得られた成果であることが、重要。この研究が今後地域を越え、日本の、世界の子育てに、そして関連分野の研究に大きな影響を与える研究として発展することを期待したい。下関市立大学では今後も、地域企業との連携を通して地域の課題を世界的なテーマにしていく研究に力を入れていきたい。」としている。

● 研究の背景

現在、言葉の遅れがみられる子どもは増えており、言語的なニーズを持つ子どもたちが増加し続けています。これまでの研究では、言語発達を促す要因として、乳幼児期の周囲の大人との言語的な関わり・ジェスチャーなどの身体的な関わりが影響しているとされていました。岡田崇さんが中心となった太田准教授らは、言語機能の発達過程を明らかにすることで、家庭や保育現場でエビデンスに基づいた多角的なアプローチが可能になることを目的に調査を行いました。

● 研究の概要

報道関係者各位
プレスリリース

1). 評価対象

下関市内の企業が運営している企業主導型保育園と連携して、保護者の同意が得られた乳幼児を対象に研究が行われました。研究では言語機能の発達過程について分析するため、急速にかつ劇的に発達していると推測される 1 歳 6 か月前後から 2 歳過ぎの約 6 か月間に注目して調査が行われました。2020 年 3 月～2022 年 5 月の間、下関市内の企業主導型保育園に通園していた園児 13 名（月齢 17 か月～20 か月）を対象に、調査前、6 か月以上が経過した後に乳幼児用の評価尺度「CRAYON BOOK」を用いた測定を行いました。

2). 評価方法について

CRAYON BOOK は保育士が日頃の子どもの様子をみて該当する項目にチェックを入れていくことで測定します。調査項目には言語概念*として「日常の挨拶ができる」、「身の回りにあるものの名前を覚えることができる」といった項目、言語的表現として「遊びの中で言葉を使ってコミュニケーションを取ろうとする」、「自分の気持ちを言葉で表現しようとする」といった項目が含まれていました。

*概念とは、「〇〇とはこういくもの（こと）であると理解（学習）していくこと」を意味します。
*言語概念とは、「大人や周りの子どもの声を言葉として認識している様子やものやことには意味と名前があり状況や文脈に添って言葉を使うこと」を意味します。

3). 結果について

統計的な分析結果を総合的に判断すると、1-2 歳児では言語概念は視覚概念と数概念から影響を受け、身体的表現を介して言語的表現の発達に至ることが推測され、図の示す仮説構造モデルが想定されました。

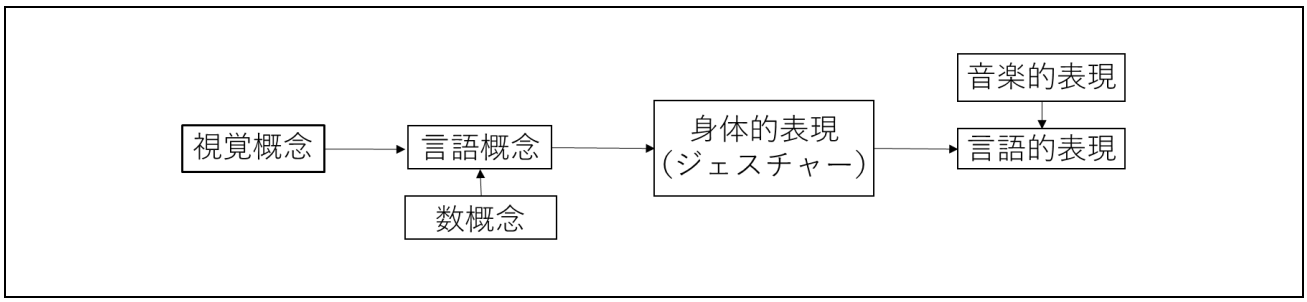

図　1－2 歳児における言語機能の発達過程の仮説構造モデル

● 調査の詳細

「CRAYON BOOK に基づいた 1 - 2 歳児の言語概念および言語的表現の発達過程に関する分析調査」

調査期間：2020 年 3 月～2022 年 5 月
調査方法：下関市内の企業主導型保育園に通園していた園児 13 名
　年齢：月齢 17 か月～20 か月
　性別：男児 5 名　女児 8 名
掲載誌：Journal of Inclusive Education, 2023, 12 巻, p. 16-30

● 問い合わせ先・担当者連絡先

広報連絡先： koho@shimonoseki-cu.ac.jp

大学院 指導教員/太田 麻美子　准教授（研究責任者）

報道関係者各位
プレスリリース
連絡先：ohta@eco.shimonoseki-cu.ac.jp